

第十一章  
人

物

○小笠原備中守資宜(号豊永)

豊永氏の始祖、清和源氏小笠原氏の庶流、肥州下松浦豊永庄に生る。阿波大西城来住後下土居にある豊永城を修築、来城し長岡郡豊永三郷一万石を領した。墓所寺内薬師堂の西。

○豊永五郎右衛門道春

父中務丞実吉の代より長宗我部氏に仕え、大平、怒田、新改久次の三ヶ村で百八十石余を領した。

長宗我部氏没落後豊永で浪人となったが、本山一揆に際し竹崎太郎右衛門と相はかり討伐軍の案内をつとめると共に、一揆勢の説得につとめ鎮庄にあづかって功があり、山内家より豊永郷大平で知行五十二石を給された。

○桑名弥右衛門

長宗我部元親に仕え、寺内、梶ヶ内に押寄せた従兄の河内豊後を討伐した桑名左馬進の孫にあたる。

二代藩主忠義のとき大窪(大久保)口番人に任命され、従来と合せて七反を給された。その後自力で開発した新田六反と合わせて、一町三反(拾三石)を与えられている。

○北窪白駕

天文、永禄年中の人、故あって豊永に住す。北窪、桑名家の始祖である。墓所大久保、仁井田神社境内。

## ○豊永藤五郎

小笠原備中守豊永の裔、長宗我部元親に仕え津家を領した豊永藤兵衛の長子である。天正地検帳に「津家村入目なし、豊永藤五郎」とあり、長宗我部の国政奉行として腕を揮った。のち盛親に従って大阪に入城、大いに戦ったが豊臣家滅亡と共に浪人し、のち肥後の加藤家に仕えた。

## ○竹崎太郎衛門

慶長八年（一六〇三）高石左馬助の滝山一揆にあたり、豊永五郎右衛門と共に討伐隊の案内役をつとめ、その功で豊永郷梶ヶ内为本田知行十石、新田役知三十石余併せて四十石余を給されている。

本姓は桑名であるが、山内家に仕え梶ヶ内に住むようになって竹崎と改めたものであるが、のち太久平政繁の代になつて本姓桑名に再び革めた。

## ○川井源次衛門勝重

初代立川下名村の庄屋並に立川口番役人である。父次郎兵衛宗勝は今川家の臣であつたが、永禄年中今川氏の滅亡と共に土佐に移り、立川に代々住むことになつたものである。（藩政時代土佐の三番所参照）

## ○本山与右衛門

初代立川上名村庄屋並に立川口番役人。土佐七守護の一人本山梅溪の曾孫である。父采女は長宗我部元親に仕えたが故あつて浪人、その行方は不明である。（前に同じ土佐の三番所参照）

## ○山本伝次郎重信

第五代豊永郷大庄屋として宝暦五年（一七五五）着任、新改の人、新改村の庄屋を含め勤続五十四年に及ぶ。子孫代々大庄屋をつとめ明治に至る。（豊永大庄屋系譜参照）

## ○八木康教

西峰八木氏の祖と云う。

紀貫之の土佐日記に「二十三日、八木のやすのりという人あり云々（上古時代参照）」の記載で知られるように無官の者ではあったが、国司の離任に際し餞別を贈り見送りに出ただけの豪族であったことは容易に推察される。

仁平元年（一一五一）豊楽寺の仏像造営寄進帖にも八木一族の名が連なり、また口碑に云う戦国の八木伊典（猪伝）はその子孫といわれる。

## ○下村左衛門氏清

承平年中（九三五～九三六）天慶の乱（藤原純友の乱）に関与して、下僕下村兵庫、小西喜藤治を随えて岩原に落ち来り、岩原下村家の始祖となる。

子孫代々地下役を勤める家であったが、下村孫兵衛重長の子、孫之丞に至って不都合の故あり、元禄二年（一六八九）断罪、その正統を絶った。

## ○吉川貞六

本山郷立川の人。元禄二年（一六八九）前記岩原道番役下村孫之丞不都合の故により断罪後、その後任として岩原村に赴任、道番役並に庄屋をつとめ、子孫代々これをついで明治に至った。岩原吉川家の祖。

## ○長瀬称五兵衛茂繁

大砂子の人。寛永年中豊永郷第四代大庄屋に抜擢され下土居に住し役知三十八石余を給せられた。但し一代限りにて御役御免となり山本氏にその職をゆずる。その後大砂子道番役となり子孫相伝え明治に至る。

## ○上村伝兵衛

豊永郷連火に住む。豊永上村家の惣領で郷土職、知行五十一石余。延享年中の人。

## ○前田平左衛門正義

前田平左衛門正征の長男、正征は永禄元年（一五五七）長宗我部氏に仕え三十石を給せられたが、のち武功により百二十石を与えられた。平左衛門ははじめ小姓組として元親に仕えたが、家督相続後物頭にすすみ六百石を給せられた。天正の地検にあたっては「杖の衆」として活躍した。

山内氏襲封後、その長男忠右衛門正光は徳川家旗本の養子となり三千石を領したが、平左衛門は故あって豊永郷に退隠余生を送った。

豊永郷前田家の祖なりと謂うも詳ならず。

## ○朝倉儀左衛門友景

越前朝倉氏の一族である。天正元年朝倉氏滅亡と共に旧縁阿波穴吹城の細川掃部頭をたより亡命す。のち土佐に來り長宗我部元親の一領具足となり、豊永郷庵谷、梶ヶ内の地を給された。孫清景のとき山内忠義により郷士となる。藩政時代商業をもって栄え、その商舗のあった処を朝倉町（現在の高知市朝倉町）と称されるほどの富商となった豊永朝倉家の始祖である。

## ○西村掃部

伝承に曰く、文治年間（一一八五～一一八九）平家の落人なり。八畝名川又に來り永住す。その子孫太郎左衛門は永祿年間（一五五七～一五六九）怒田に次郎、三郎は西峰に別居、共に豊永郷西村家の始祖となりしと。

## ○桜井右京資友

南朝に属した新田義貞の家臣。新田氏の滅亡により阿波の小笠原氏をたより三好郡中西郷に住んだ。しかし小笠原氏もまた北朝に従属することになった為、土佐に入り豊永の大砂子に土着、姓も中西と革めた。

大砂子鎮座の新田神社は資友の創立したもので棟札に「応永十七年（一四一〇）桜井資友七十三才」とあり、その由緒は明白である。

豊永中西家の始祖たる人である。

○都築兵部丞

豊永小笠原家の腹心、主に従いて応永年中土佐に入り豊永に來住し、大豊における都築家の祖となった人である。応永二十四年（一四一七）の豊築寺薬師堂鐘勸進帖にすでに都築善助、都築久衛門、都築弥十郎の名があり、天正年間には長宗我部氏の一領具足以上の土分豊永郷のみにも十三人を数え、大いに栄えた。

山内氏入国後はその殆んど農に帰す。

○三谷三九郎

西峰村庄屋兼西峰口番人の十代、三谷半兵衛の次弟である。承応二年（一六五三）野取領知（新田開拓）によって得た田地を給知として山内家百人組郷士に取立てられ、大野向ヤシキに住み、子孫相伝え明治に至った。

○渡辺高右衛門

豊永渡辺の始祖、摂津渡辺の村の出なるも故あって平氏に属した。文治元年（一一八五）屋島に戦うも利あらず、祖谷山を経て豊永に落ち中内（俗に渡辺の城という）に拠る。

高右衛門に三子あり。数年を経て世の落着きを見定めたのち、長男を中内（現在の岡田）、二男を川井（現在の大ヤシキ）、三男を三津子野（現在の下岡）に土着せしめ、自からも弓矢を鍛に代え開拓に従事した。中内に没す。

○杉本次郎左衛門輝茂

永仁年中（一二九三～一二九八）北条宗方の執権争いに味方したが宗方が北条貞時に誅せられたことにより、追討

の目を逃れ、山城の国に落ちた和田五郎茂明の子である。茂明は山城の国から阿波に移り、輝茂も共に三好郡大西に住んだが、正和年中に本山郷に移住し、輝茂の三男次郎太郎友澄が本山城主八木氏（本山氏の祖）に仕え杉村で知行をうけ、杉に住むことになった。

この友澄から七代を経て杉本市右衛門行英の代に長宗我部氏に仕官、その子市之助、六兵衛、孫右衛門の三名は天正十四年の有名な豊後戸次川の合戦で戦死した。

#### ○則倉左仲左衛門

平氏に属し、屋島の戦に敗れるや祖谷山に落ち、のち豊永永淵に住む。北村家の始祖となる。永淵大泉にその墓所あり。

#### ○寺石左馬進

長宗我部氏に仕え、強弓を能くしたと伝えられる。寺内柳根にその墓所あり。

#### ○吉松与三八正行

豊永郷大砂子口初代番人に任命され、役知三十石、苗字帯刀を許された。与三八は下番所二ヶ所をおき、夫々下番人をおき役知のうち十石をさいてこれにあてた。

吉松家は代々大砂子村の名本をつとめ、番人を兼務したが、番役は三代常左衛門で御役御免となり、四代番人として同村の長瀬重左衛門が就任、爾来明治に至るまで長瀬家がつとめた。

吉松家は名門高知市万々吉松家の分流であると伝えられている。

## ○吉松象之丞

大砂子吉松家に出生、通俗的の歌文に長じ人口に膾炙かいじやうせるもの多し、文久元年歿（村づくし、花づくしの項参照）

## ○豊永惣左衛門

豊永氏の一族、慶長五年浦戸没落の際、相役立石助兵衛と相謀り京阪を往来して長宗我部盛親の降伏につき談判、条件等井伊直政と交渉、最後まで主家の為につくした。

万策つき長宗我部改易のち、芸州福島家に仕官した。

## ○佐伯正信

中内、平石家の祖である。佐伯姓を平石姓に革めたのは江戸初期であると云う。代々中内に住み神職の家筋である。

寺内豊楽寺所蔵大磐若波羅蜜多經六百卷の奥書に「承応二十年八月上旬書写此畢、土州長岡郡下山境村粟生定福寺常住、結縁旦那中内佐伯正信」とある。

伝承によると配流された巫覡の裔であるという。

## ○三谷佐渡

西峰三谷家第四代、長宗我部元親に仕え、豊永で百拾石を領していたが、元親の讃岐攻略に従軍、藤目の城の戦いにおいて武功あり、岩村、田村にて六拾石の加増をうけ、都合百七拾石を領した。



出給料知役人の番人の西峰の  
（東土居大家所蔵）

○三谷次郎三郎

本山一揆の際子州境まで行動し、山内一豊公より賞詞並びに知行八反（八石）を給せられると共に西峰村庄屋ならびに西峰口番人に任命され、西峰三谷家中興の祖となった人である。天正地検帳には筏木名給三谷次郎三郎分とある。

○三谷平五郎

十代三谷半兵衛の弟、分家して一戸を構え、元禄十六年

（一七〇三）西峰村庄屋となる。（現在の松本家）これの庄屋役就任によって本家三谷家は番役人に専念することになった。

○岡林市左衛門重則

豊永郷馬瀬村に住す。長宗我部元親に仕えた一領具足、天正元年（一五七三）馬瀬村名本に就任した。爾来明治に至るまで子孫相伝う。その祖は安芸国虎に殉死した岡林重信の子、総右衛門重虎から出ていると云う。

○豊永惣右衛門

豊永郷柘植（現在の津家）の給人豊永藤兵衛の嫡子である。

安芸郡安田町豊永家所蔵「豊永先祖聞伝記」によると「但聞伝所惣右衛門は藤兵衛の弟と申伝うも藤兵衛の嫡子な

り」とある。

慶長五年（一六〇〇）東西手切による関ヶ原の戦にあたり長宗我部盛親は結局西軍に組することになった。

当時安田に住んでいた惣右衛門も早速これに応じたことが「豊永省蔵氏所有古文書」に見える。

一、貴様御病氣之由御見舞申度候得共内々申通天下之合戦大乱に罷成候。西国中国之侍皆々大坂江相詰、此度土佐侍先達而連判申合候事

一、立石勘之丞、横山新九郎兵衛、吉田三郎右衛門、五百歳新九郎、江村藤兵衛、豊永惣右衛門、桑名太郎右衛門、吉松左衛門、以上八人

早速殿様江差上申候処、倍八幡相違無御座候。仍連判如件 桑名太郎右衛門

慶長五年庚子六月十三日

吉松左右衛門殿

### ○豊永斧馬

露とだになにか惜まん我が命

惜しむは後の名のみなりけり

の辞世で有名な二十三士の一人である。

武市瑞山が獄に投ぜられ、勤王の威振るわざるを嘆き、清岡道之助等と共に野根山に事をあげたが失敗し、元治元年（一八六四）九月五日奈半利川原で斬られた。二十七歳。

斧馬は天保八年（一八三七）豊永吾八の二男として生れた。ある時我が家の系図をみて祖先が小笠原越後守豊永であつて豊永の領主たるの名門なることを知り、昔義経が鞍馬山で源氏の系図をみて発憤したように、彼もまた侍となつて家を興そうと決心したという。克苦勉勵の後、田野郡奉行所の民兵に採用され、文久二年（一八六二）山内容堂

の江戸下向には五十人組の一人として参加している。

### ○森本左内

土佐郡布師田村（現高知市）の人、文化、文政の頃豊永郷を遍歴して教育に携さわり豊永における近代の学祖として博学の誉が高かった。性恬淡磊落<sup>せいてんたんらいらく</sup>、医術にも長じていた。天保九年（一八三八）安野々長沢家にて病死す。

### ○秋山玄清

石堂の人、医を業とした。のち明治六年寺内に小学校を開き子弟の教育に当った、当時の嶺北における有名な学校の一つであった。

### ○森彦惣武道

磯谷森家の祖、元和四年三月、本山郷磯谷村の名本に就任、同八年七月勤仕五年にして死亡す。同年、長男弥左衛門武国跡目を継いで名本となり、爾来長兵衛武秀、甚左衛門武安、弥左衛門武春、左近右衛門武政、幸左衛門武重、怒右衛門武義、養子茂助武信、同養子潔作武加、孝三郎武末、喬木（加巻）と子孫相伝えて明治に至った。

### ○高橋又四郎

高橋又左衛門（幼名槍之助、安芸郡奈半利村中里に住し、長宗我部元親に属し阿波板野郡勝瑞城にて戦死）の実弟である。

長宗我部氏小姓役として出仕したが、故あって浪人、百姓に帰ったが、慶長五年（一六〇〇）山内氏入国後召出され本山郷葛原（大豊町葛原）村に転住、葛原、下関の二カ村の支配役となった。嫡子善衛門は父の又四郎の跡をついだ

が、善衛門の弟孫兵衛は下関にて新田を開発、のち下関村の名本となった。

### ○岡崎伝太夫

延享二年（一七四五）豊永郷大庄屋長瀬弥五兵衛の郡奉行あての差出しによると、その中岩原村の条で「一、社人一人 徳太夫」とある。

この徳太夫とは代々岩原村の三宝宮（岩原神社）の神職をとめる岡崎家の祖で、岡崎播磨正藤原正徳とも称した。岡崎伝太夫はこの徳太夫の祖父である。生来穎敏剛毅の秀才で和漢の書は勿論、書画、武術にも妙を得、かたわら土木水利に力をつくし、独力で岩原村の上井手を開鑿し多くの田地を拓き後世に恩沢をもたらした。

この上井手の起工当時のことである。赤根川切石滝より遠見測量に当って、昼は竹竿の末に白紙をつけたものを所々に立て、夜は提灯に点灯して水準を測り、七昼夜を経て漸く水平線を定めた。その帰途大向いという家に立寄り昼食を喫しながらその老婆に「婆さんよ、やんがてこの背戸へ奥荒より水を引くけに、夏内用水が便利になるぜよ」というと老婆は「にいさんよ、奥荒の水がこの背戸へ来るようになったら、わたしも元の十八に若返えるぜよ」と一笑に付したと云う。

伝太夫は正徳五年乙未三月（一七一五）穿井まくせいに着手、昼夜を分たぬ辛酸を経て、享保三戊戌年三月二十八日（一七一八）漸く完成した。

当時村人達は穿井工事をみて、伝太夫は気が狂ったとか或いは野中の阿呆掘りだと云って嘲笑していたが、ここに至って前言を悔い、争って水利の恩恵に浴そうと開拓に従事し伝太夫の子勘太夫の時代には井水の分与を請うものさえ生じたという。

伝太夫は寛保二年（一七四二）任官して、岡崎相模正藤原正伝と称し、宝暦四年（一七五四）没した。

## ○豊永快蔵

豊永快蔵は文政十年（一八二七）東豊永の生れ。嘉永二年二十三歳の時医学に志を立てて上阪、医師市原佐市郎に入門した。佐市郎は当時牛痘接種の法を行って名声あり、快蔵その方法を伝受し、種痘を齎もたららして帰国の途につき、泉州堺浦より兵庫丸という小船に便乗した。

船が阿波沖を過ぎんとしたとき、たまたま風浪大いに起って航行不能となり、やむをえず夷浦に寄港した。

この遭難のため、旅囊、着衣等を失ったが幸い種痘を完うしていたので停船七日に及びその種痘の腐敗するを懼おそれて陸路甲浦より野根越しに豊永に帰った。

彼は帰郷後直ちに親戚、知己の児童に試みて好結果をえたが、その功を認められて、藩庁郡方より文久三年（一八六三）高岡郡下へ種痘を命ぜられたのをはじめ、各地に出張してその術を土佐一国にひろめた。

豊永快蔵こそ土佐へ種痘をひろめた最初の人である。

## ○吉田秀光

彼は天保九年（一八三八）吉田秀政の第三子として下土居に生まれた。通称を吉弥と云う。幼少より穎悟の誉れ高く、九歳の時書を細木鷲儼（或は鷲仙か）に学び嘉永四年十四歳の時より奥宮晚峰及び南部静斎について王陽明の学を専攻し、かたわら鈴江軍平政光に従い武術を学び慶応六年六月その允許をうけた。更に漢法は吉田維政に、洋法は萩原静安について学んだ。

明治元年、怒田村民の懇請によって、同村に業を開き、傍ら私塾を設け「至誠学舎」と称し後進を教導した。もともと秀光は兄秀重早世の故をもって、家督をつぎ医をもって業としていたのである。

明治十年川井村に小学校が設立されるやその教員となり、爾來郷土の教育、殖産興業に尽力した。号を雲濤といふ。(大正六年頌徳碑建立大正公園)

○小笠原永晴

彼は安政六年(一八五九)八畝に生まる。幼より気骨あり、寡黙なるも事に当って勇断果決、もって人を驚かすものがあつたと云う。戊辰の戦には拔擢されて兵籍に入り、各地に転戦して功あり、郷に帰って豊永郷八畝村吏となり、ついで大平村戸長役場に勤務、のち粟生村外十四カ村の官選戸長に累進、のち村長、郡、県会議員をつとめた。

(頌徳碑建立大正公園)

○三谷藤十郎

西峰口最後の番人である三谷助之進の三男である。明治維新の過渡期に土佐藩の計画による豊永郷民兵に採用され、長岡郡第五中隊半隊指引(現在の小隊長格)に任命されている。

○富永有隣

富永有隣は長州の脱藩者である。文政四年の出生、自他共に許す国学者であり、漢学、易学にも長じていたと云う。吉田松陰と款を通じ肝胆相照した仲であつた。号して陶峰とも履斎とも云う。松下村塾では松陰と共に幾多の俊才を育てたが、のち吉敷郡の仁光寺に定基塾を開いた。

明治三年山口藩の兵制改革に当り藩兵に抵抗したため士分を除かれ、終身刑を申し渡された。しかし有隣はその性格からして牢獄に身を委ねるような人物ではない。同志と謀り夜半ひそかに脱獄(同志は途中死亡)転々と諸国を逃れて



富永有隣が穴居した通称有隣岩  
(東梶ケ内)

ついには土佐に入った。

はじめ介良の大石家、綿織家、野市の森家、山北の安岡家などを転々としていたが、追捕の急を知って、<sup>ついで</sup>斐生の小松家の親戚である豊永家を頼って豊永郷に入った。

豊永に來た有隣は梶ケ内の名本豊永家、及びその分家小松家、そして更にその縁故をたどって西峰の三谷家(番所)西川の岡本家、奥太田の桑名家など郷士、名本の家を転々と移り住んだ。大久保の桑名家には二十四枚に亘る有隣の画いた絵が残されているが、これは奥太田の桑名家隠棲中の作である。尚この桑名家には祖父正仁が有隣に習字を教つたという机や謝礼として受取つた西郷札が現存している。

また梶ケ内(佐賀井)に「有隣の岩屋」というのがある。

大きな岩盤の下に洞窟があり、人間がらくに入れる穴がある。中は可成りの広さで十人も入れる三段の間となっている。出口は入口よりも大きい穴になっている。有隣は追捕の噂を聞いたたり、不穏な感じをうけると直ちにこの岩屋に身をかくしたらしく、逃亡以來九カ年の潜伏にこの岩屋が大きく貢献している。

明治九年十一月、さすがの有隣も時代の流れと、追捕の網には逃げきることが出来ず、粟生村郷士小笠原家で官憲の手により捕縛された。